

Commenter en japonais le texte suivant et le traduire du début [l. 3] « ホノルルは... » jusqu'à [l. 14] « ... 速さを競うたりしている。 ».

ハワイ

一月一日

ホノルルは、未開と物質文明とのいかにも巧みな融合である。「巧みな」というのは当たらないかもしれない。本来この二つは、何ら融合をさまたげられない本質
5 をもっているのかもしれない。

動物園の前の芝生で爆竹を鳴らしてさわいでいたアロハを着た跣足の土民の少年
たちが、追いつ追われつして街路へ駆け出した。この薄汚れた悪童どもはパーキン
グされている無数の自動車の中の、光沢の美しい一台の新車に四方から攻め寄せて、
見る見るうちに、ドアをあけてこれを占領して、窓からつき出した顔は何か大声で
10 わめきながら、忽ち車を走らせて立去った。それは事実彼等の自動車なのである。
自動車は三人に一台の比例で普及している。

水族館では目もあやな魚たちが泳いでいる。色どりあざやかな蹴球選手のように
それがすれちがうときにもつれ合ったり、競馬の騎手のような装いをして並行して
速さを競うたりしている。亀は前肢を翼のようにはためかせて遊弋し、海蛇は海底
15 の岩蔭から、鋭い歯の並んだ忌わしい口をかつとひらいている。これらの熱帯魚の
服装が、それからまた州花ハイビスカスや「極楽鳥」bird of paradise という花、「虹
の驟雨」Rainbow Shower という花や、Ti leef, Anthuriune Alamaula (きいろい花)
Plumeria, Vanda-joaquim (ワンダ・ワキームというレイにつかう花) などの花の服飾
が、そのままアロハというあの人間どもが服飾なのである。風景は完全に広告画家
20 の絵具で描かれており、一寸^{ちよつと}汚れかかると忽ちペンキを塗られて新築同様に生まれ
かわる色とりどりの家のたたずまいも、^{おびただ}夥しい自動車の色も、空の色も、海の色
も、五セントで売っている紙筒入り^{こおりいちご}氷 苺のシロップの色も、われわれが人工的な
着色だと思い込んでいる、あのライフやコリヤーの天然色広告写真のありのままの
現実化なのである。ワイルドの理論を借りれば、ハワイの風光は、商業美術の発達
25 なしには考えられない筈である。

ハワイにはわかりやすくないものは何もうけ入れられないように見えるが、ハイフェッツもメニューヒンもこの島へ来るのである。東京のようにメニューヒンを祭り上げる事大主義の歓迎をあざ笑って、二世たちは彼らを冷静に迎えたことが自慢である。

- 30 ハワイでは精神の緊張がともすれば失われるので、意外に肺結核や胃腸病や精神病が多い。自動車の発達で足を退化させ、消化を不良にする傾向を、皆が心配している。二世部隊の中勇義烈が、こうした **degeneration** の危惧に対するまことに有力な反証になった。

三島由紀夫（1925-1970）, 『アポロの杯』, 1952年.